# 野村克也

前阪神タイガース監督

例年以上の猛烈な暑さが続いた今夏は台風の当たり年でもあった。その日は台風一過の影響か、どこか秋めいた雲が空を覆っていた。野村克也氏と会ったのは、そんな日の午後。だが私達を最初に出迎えてくれたのは、妻の沙知代さんであった。赤い水玉のスーツを身にまとった沙知代さんが現れると、周囲がパッと明るくなる。「華がある人だな」というのが第一印象だ。彼女は野村氏の待つ場所へと案内してくれた。

野村氏は店の一番奥の席にどっしりと座っていた。寡黙だが、威厳のある雰囲気。「野村―野球＝0だからね。うまく話せるかどうか」と、彼はゆっくり話を始めた。

「最近つくづく思うのは、女性が強くなったなということ。男と女、すべてが正反対になったね。そう、うちの場合も完璧に女房が強い。〝女性上位の国は栄える〟とイギリスでは言うらしいけど、果たしてそうなんだろうか。でも、野村家を考えれば発展はしている。よく彼女からは『(発展したのは)誰のおかげよ』と言われるが、俺のおかげちゃうんか?と(笑)。まあ、とにかくうちの女房は強い」

## 運命の出会い、そして結婚 惹かれたのは彼女の強さ

野村氏は「彼女は負けん気が強い。悪く言えば見栄っ張り」と付け足す。自分にとって不利な面は他人に絶対に見せない。出会って以来、そんな沙知代さんの態度は徹底して変わらないと言う。

野村氏と沙知代さんが出会ったのは、今から30年以上前。南海ホークスに所属していた野村氏が試合のため、東京を訪れていた時のことだ。ふかヒレラーメンがうまいと評判の原宿の中華店で、二人は出会った。

「女房は『ママ、何か食べさせて』と真っ黒な顔して店に入ってきた。その頃、彼女はボーリングボールを輸入するライセンスを持っていたから、海外をあちこち飛び回っていた。その日もハワイ帰り。すぐに店のママから彼女を紹介されてね。それが運のツキですわ」

沙知代さんは野村氏より3歳年上で二人の子持ち。最初、野村氏は「結婚は100%考えなかった」と言う。当時既に別居状態だったとはいえ、野村氏は妻ある身。だが逢瀬を重ねるうちに野村氏は沙知代さんに惹かれていった。そして二人の間に克則さんが生まれ、野村氏は沙知代さんと正式に結婚をした。

「だらしないと言われるかもしれないけど、俺は非常に弱い。女房には安心してよっかかっていられるんだよね。そう、杖みたいに。あと、彼女はお袋に似てる。あの鼻ペチャなところなんかソックリだよ。俺は母子家庭だったからマザコン。母親が子どもに与えるような愛情に飢えていたんじゃないかな」

野村氏は3歳で父を亡くし、母の女手一つで育った。明治生まれの母もまた強かったと言う。子宮がん、大腸がんを患い、63歳で他界。親孝行はまだこれからという矢先だった。つい、亡き母の面影を女房に重ねてしまう。顔が似ているので尚更だ。

だが、野村氏の理想の女性像は三つ指をついて夫を迎えるような、しとやかな女性。しかし長きに渡る歳月、彼の隣にいるのは理想とは正反対の妻・沙知代さんだった。野村氏に結婚を決意させるに至った、一番の理由は何だったのだろうか。

## 生活面も金のことも 何もかもまかせきりだった

「女房はとにかく生活力旺盛。もし一文無しになっても、彼女ならどこからか金を調達してくるよ。『お金儲けなんて簡単よ』が女房の口癖だからね。彼女は生きてゆく上で重要な人を見極めるのが上手。そういう人を大切にするから、いいブレーンも多い。それから意外と思うかもしれないけど、彼女は面倒見がいい。でも裏切られたら、黙っちゃいない。だから〝怖い〟と思われるんだろうな」

頼りになる、生活力旺盛。これらの言葉はかつて男性を形容する時に用いたものだ。今でこそ普通だが、女性の自立が珍しかった30年以上前では稀有なことである。「自分は弱い」と断言する

# ボクが弱いから、神様はとびきり強い女性に巡り合わせてくれたんだと思う

男に求めるもの、女に求めるものが様変わりしている。
「男は度胸、女は愛敬」という言葉も、今は死語になりつつあるようだ。
だが30年以上も前に、女房に“強さ”を求めた男がいた。
野村克也氏――。恐妻家と言えば、まずこの人の名が挙がるほどだ。
妻の強さは幾度となく、夫を絶望の淵から救ってくれた。
だがある日、妻は夫の生命線でもある野球を奪ってしまう……。
誰もが“離婚”の二文字を思い浮かべた脱税事件。
しかし野村氏の妻に対する愛情は、一度も揺らぐことがなかった。
なぜ？　どうしてそこまで妻を思うことができるのだろうか？
その理由を野村氏がじっくりと語ってくれた。

野村氏にとって、沙知代さんとの出会いは運命を感じるものだった。

「夫婦とは不思議な縁で結ばれし、と言うけど確かにそう。でも俺の場合は別で、神様が彼女を私に提供したんじゃないかと思う。この男は弱いから、強い女じゃないと駄目だと。生活面もそうだけど、金のことも彼女にまかせっきり。俺は100円稼いだら、110円使う性質。まかせ過ぎて、結果的にあんなことになってしまった」

## あの〝事件〟があって夫婦の絆が一層太く

記憶にまだ新しい〝サッチー脱税事件〟である。Xデーと言われた前後、テレビをつければ、野村邸の前からレポーターが中継する場面が流れていた。スポーツ新聞の見出しには〝野村夫婦離婚か？〟という文字が踊った。当時阪神タイガースの監督だった野村氏は、沙知代さんの逮捕後、即辞任。南海ホークス時代、解任をされたのも沙知代さんとの不倫が原因だった。

彼は一度ならず、二度も同じ女性が原因で、野球生命を絶たれてしまう。世間の誰もが二人の破局を疑った。だが、その予想は見事に裏切られた。

「あの事件があって、かえって絆が強くなったね。この時ばかりは、俺と克則で〝俺達が支えてやらねば！〟と息を荒くした。彼女は低血圧の寒がり。弁護士から拘置所に暖房はないと聞き心配

彼女が泣いたのは見たことがない
俺が死んだとき
涙を流すかどうか知りたいんだけど
多分、いや絶対に泣かないね（笑）

して、毛布やら色々な物を差し入れた。彼女の好きなピンク色のジャージとかね。ところが本人はへっちゃら。出てきた第一声が〝あんなもの、着れるわけないでしょ。よけいなことしないで！〟だからね。もうがっかり（笑）」

取材陣が笑っていると、別の場所で打ち合わせをしていた沙知代さんがふと顔を出した。「どうせ私の悪口でしょ？」とノートをのぞきこむ。野村氏は沙知代さんに取材が終わったあとで、大好きなベルサーチの店に行くと告げた。すると沙知代さんは「あんた、あんまり働いてないんだからね！」と野村氏を一喝。「ほらね。あーいうことですわ」と野村氏は、出て行く沙知代さんを目で追いながら、クスッと笑った。「拘置所では一生懸命小説を書いていたみたいで、こんな分厚い原稿用紙を持って帰って来たよ。そのうち本になるんじゃない？　女房のことだから、どっか出版元を探すでしょう」

長期に渡ったサッチー・バッシング、そして野村氏の生命線であった野球を奪われても、なお揺るがない二人の絆。数分に一組が離婚する現代、彼等のような夫婦は珍しい。

どうしてそこまで妻を信じ、深く愛せるのだろうか。二人にとって夫婦の危機は存在しなかったのか、と聞いてみた。野村氏は古い思い出を手繰り寄せるような表情を浮かべた。

## 家庭でも女房を受け止める優秀なキャッチャー

「基本的にこの女についていけば、俺は間違いないと思ってるんだよね。しょせん俺は野球馬鹿で世間知らず。だからああいうしっかり女房がいないと駄目。夫婦の危機？　彼女も若い頃は大きな声を出すこともあったな。それも近所の公園のブランコが揺れるくらいのね。それが一方的なヤキモチ。前の女房がなかなか離婚用紙にハンコを押さないことでよく喧嘩をしたかな。サッチー・バッシングについては、公共の電波を使って誹謗中傷をする人間のレベルを逆に疑ってしまうよ」

結局軽いケンカ程度で、離婚騒動にまで至った事件は皆無。もちろん、今回の事件においてもそれは変わりない。もし世界中が沙知代さんの敵になったとしても、野村氏はたった一人でも戦うに違いない。野球選手時代にキャッチャーであった野村氏は、家庭でもまた同様。妻のすべてを受け止めているのだ。

「少年時代に貧乏だったせいか、俺は非常に忍耐強い。ガマンせんでもいいものまで、ガマンしてしまう。女房は自分の思い通りにいかないとすまない性格。夫婦は元来他人だから、当然考え方も違う。だから互いに我を張っても仕方ないんだよね。俺達の場合は俺が折れるしかない。〝夫婦とは夫の思い、妻の思い、互いの思いを成熟してゆくことである〟って言葉があるけど、まさにその通り。俺はすべてにおいて原理原則を見据えた上で行動するが、夫婦となるとそうはいかない」

ガマン。夫婦にとって確かにそれは必要だが、ガマンだけで30年以上生活を共にするのは不可能だ。相手の長所も欠点も含め、互いに認め合ってこそ、長く生活を続けていけるのではないのだろうか。野村氏の場合もまさにそうである。

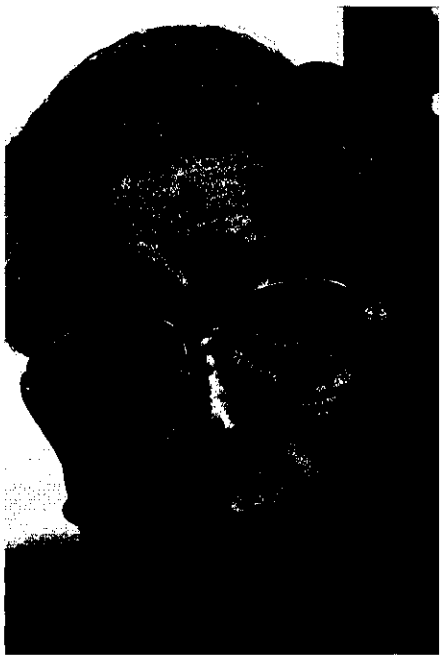
「彼女と同じ屋根の下で暮らせる男は俺しかいない。沙知代のそばには、俺が絶対にいてやらねばならないと思っている。夫婦なんていうのは、最後はお互いが必要かどうかではなかろうか」と野村氏は言う。

## 欠点ばかりを見ていては夫婦なんてうまくいかない

「人間が最低限持っていなければならない要素が3つある。節度を持つ、他人の痛みを知る、問題意識を持つ。うちの女房は皆欠けてる。つまり人間失格（笑）。だからバッシングもされる。でも人間なんて誰でも欠点がある。縁あって夫婦になったんだから、なるべく長所を見たほうがいいよね。聖人君子なんていやしないんだから」

現在、野村氏には唯一の願望がある。「俺が死んだら、女房が涙を流すかどうかが知りたいんだよね。ただ死んじゃったら分からないから、それが困ってるんだよ。そう言ったら、女房は、〝棺桶に携帯電話を入れてあげるから、誰かに電話させるね〟だって。でも俺の予想だと多分、いや絶対に泣かないね。長く一緒にいるけど、そういうようすは一度も見たことないよ」

野村氏の予想が見事的中したとしても、彼は決して沙知代さんを責めたりしないだろう。その強靭な心こそが、野村氏が惚れた彼女の最大の魅力なのだから。



**野村 克也**（のむら かつや）
1935年6月29日、京都府生まれ。18歳の時に峰山高校から契約金皆無のテスト生として、南海ホークスに入団する。見る見るうちに頭角を表し、数々のタイトルをとる。65年には戦後初の三冠王を獲得。70年より8年間、その才能を買われ選手と監督を兼任する。その後、ロッテ、西武で選手としても活躍し、45歳の時に引退。その後ヤクルト・スワローズ監督、阪神タイガースの監督に。近著に『女房はドーベルマン』（双葉社）がある。


取材・文／葉石かおり　撮影／北村泰弘　デザイン／三村恭子